

トランスナショナルな移住とアイデンティティの変容 ―日系ブラジル人の「デカセギ」現象を事例として―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
(むらい・ただまさ)

村井忠政

はじめに

筆者はここ数年、日系ブラジル人をはじめとするニューカマーをめぐる諸問題に取り組んできたが、最近とりわけ強い関心を持っているのが、日系ブラジル人のトランスナショナルな移住がアイデンティティに及ぼす影響に関する研究テーマである。

周知のように、ブラジルから日本への「デカセギ現象」と呼ばれる還流型移住 (return migration) は、一九八〇年代半ば頃から始まり、一九九〇年の「改正」入管法の施行以降急増し、その後のわが国経済の長期低迷にもかかわらずその数は増え続けており、いまや三〇万人を超えている。世界経済のグローバル化に付随して発生した国境をまたいだトランスナショナルな移住が移民研究者の注目を惹きはじめからすでに久しい。まさに日系ブラジル人のケースがそれに

当たるわけであるが、このようなわが国への還流型移住は海外の研究者の関心をも惹き始め、すでにいくつかが研究成果もあがっている。本稿においては、日系ブラジル人の「デカセギ」と呼ばれるトランスナショナルな移住によって、「トランスナショナル・アイデンティティ」とも呼ぶべき新しいアイデンティティが立ち上げられていくプロセスを考察してみたい。

〈ポジティブ・マイノリティ〉から 〈ネガティブ・マイノリティ〉へ

ブラジルの日系人は、その勤勉性、誠実さ、高学歴のゆえに、概して社会経済的地位は高く、ブラジルのマイノリティ・グループのなかでは「ポジティブ・マイノリティ」として尊敬の的になってきている。事実、研究者のあいだではよく知られている。ブラジルにおける日系人研究の第一人者である前山隆教授（一九八二、二〇〇

一）によれば、ブラジルの日系人は自らを「ニッポンジン」ないし「ヘジャポネース」と呼び、周囲の白人を中心とするマジヨリテイとしての非日系ブラジル人を「ガイジン」ないし「ブラジレイロ」と呼んでいるという。それほど彼／彼女ら日系人は自らの日系人としての民族的アイデンティティに誇りとこだわりをもっているといえる。

日系ブラジル人の聞き取り調査を実施した日系人研究者のエウニセ・コガ（一九九四、一九九五）と森幸一（一九九九）は、彼／彼女ら日系ブラジル人が来日する前に抱いていた「日本」像の内容がかなり共通していること、その「日本」像が両親や近隣の日系人社会から直接・間接に教えられた形で形成されたステレオタイプであることがわかったという。日本人移民はブラジル社会で自分たちが「ニホンジン」としてのアイデンティティを持つようになったとき、その美徳の有無こそが自分たちと「非日系ブラジル人」(ガイジン)との決定的差異であると認識した。「勤勉でない者」や「犯罪者」等の彼／彼女らにとって負のイメージは、本来の日本人ではなく「ガイジン」である本来のブラジル人の資質とされたのである。彼／彼女らが自分たちの子どもに伝えようとした日本人のイメー

外国人住民との共生

ジは、このように「ブラジル社会の中での日本人・日系人」を意識したときに創り上げられたステレオタイプと多くの部分が共通している。

わが国への初期の出稼ぎ労働者の中には、本国ブラジルでは管理職などのホワイトカラーや、教師、医師などの専門職に属する人が少なくなかった。ところが彼／彼女らが出稼ぎ労働者として日本を訪れ、いわゆる「3K職場」で不熟練労働者として働くことになる、ホワイトカラーからブルーカラーへと彼／彼女らの社会経済的地位は突然転落し、日本人の外見をしているが本当の「ニホンジン」ではなく文化・習慣を異にする「ヘブラジル人」「ガイジン」として否定的な評価を受け、差別と偏見の対象となる。日系ブラジル人と同じ職場で働く日本人従業員の目から見た日系人労働者に対する評価は、その多くが否定的なものである。かくして「ブラジルでは自らを「ニホンジン」とみなし、それに誇りを抱いていた日系ブラジル人は、皮肉なことに日本では「ガイジン」とみなされていることに気がつく。

日系ブラジル人の多くは日本への出稼ぎで単純労働に従事することになることを覚悟して心の準備はして

くるものの、現実にはそれを経験することには何らかの心理的ショックが伴うものと思われる。ある日系人女性には次のようにそのときの気持ちを語っている。

日本に行けば工場で単純労働に従事しなければならぬことは分かっています。私たちの社会的地位が下がることはわかっていたし、お金を稼ぐためにはそれもやむを得ないこととして受け入れていました。それでもやはり、工場の作業服をはじめ身につけて組み立てラインに並ぶと、本当に心が傷つくし、プライドにダメージを受けるんです。

ブラジルにあつて専門職や管理職、あるいは企業の経営者であつた者にとつて、この職業上の地位や誇りの喪失はとりわけつらい経験となるであろうことは想像に難くない。このような日本における日系ブラジル人の置かれている複雑な状況を、ある日系ブラジル人大学院生は次のように語っている。

ぼくには日本人の血が流れているし、外見は日本人と変わりありませんが、日本に来て分かったことは、ぼくの心もぼくが身に付

けている文化もブラジルのものではないということでした。つまり、ぼくのハードウェアは日本製ですが、ソフトウェアはブラジル製だというわけです。

こうして日系ブラジル人の日本における社会的地位は、「ポジティブ・マイノリティ」としてのそれから「ネガティブ・マイノリティ」としてのそれへと変遷を遂げることになる。

対抗アイデンティティとしての 〈ブラジル人アイデンティティ〉の 立ち上げ

日本社会でのネガティブな経験をした日系ブラジル人の多くは、ホスト社会である日本社会に受け入れられず周辺化された存在となる。その結果、日本への移住以前にもついていた日本とのエスニックつながりから距離を置き、日本への移住後は日本文化へ同化することに抵抗を示し、逆にブラジル人としてのナショナルリズム感情が強化され、自分がブラジル人であることを強く意識するようになる。日本へ還流型移住をした日系ブラジル人の中で見られるこの「対抗アイデンティティ(counter identity)」については、多くの研究者が指摘し

ている(森 一九九九、Linger 2001; Roth 2002; Tsuda 2003; Lesser 2003)。ここでわれわれの注目を惹くのは、トランスナショナルな移行が、場合によっては、意図せざる結果として、ナシヨナリズムを生み出すことに寄与することがあるという事実である。それでは、このような日系ブラジル人の対抗アイデンティティは、具体的にどのような形をとって現われるのだろうか。ここでは群馬県大泉町の日系ブラジル人によるサンバ・パレードにまつわるエピソードを紹介しておく。一九九一年から始まった大泉町のサンバ・パレードは、年々その参加者が増え、また観客も二〇万人を超すまでになった。ところがブラジルの日系人は、普通サンバ・パレードには参加しないという。深沢正雪(一九九九)によれば、サンバ・パレードには「貧乏人の祭典」「裸」「暴力沙汰がつきもの」というイメージが強いため、中産階級を自認する日系人は参加してこなかったというのだ。このような日系人たちが日本でサンバを踊り始めたのには、まさに日系人の対抗アイデンティティのパフォーマンスのひとつの現われとしてとらえることができる。

対抗アイデンティティに見られるケースのように、ホスト社会日本に受け入れられないがゆえに、日本文化への同化を拒み、あえてブラジル文化との同一化を強調することで自己のアイデンティティを護ろうとする心理学的ストラテジーとは反対に、何とかして日本社会に受け入れてもらおうとして文化的同化を試みる少数の日系ブラジル人が経験する心理的問題も、深刻な病に導かれる結果をもたらす。日本社会に受け入れてもらおうとするあまり、本来の自己を押し殺して、無理やり日本人になりきろうと試みる(これをパッシング(Passing)と呼ぶ)ことで、これらの日系人は、一見したところ仕事のうえでは日本社会にうまく適応したように見える。事実、サンパウロの精神科医師ナカガワ(Nakagawa 1994)は、日本でのデカセギからブラジルへ帰ってきて彼のもとを訪れる日系人患者の多くは、日本語の読み書き能力が平均的な日系人よりはるかに優れていると述べている。しかしながら、彼らは他面においてアイデンティティの拡散、心理的ストレスと不安、日系人仲間からの疎外、そして究極的には否定的な自己イメージの内面化などに悩まされることになる。

〈ニッケイ・アイデンティティ〉の立ち上げ

初期のデカセギ現象との対比で、近年におけるデカセギ現象に見られる特色としてあげられるのが、ひとつには日本滞在の長期化ないし永住化の傾向であり、もうひとつにはデカセギの主体の多様化である。初期のデカセギでは一世と二世が主体であったが、現在はさらに「日本人の配偶者」としての非日系人(これらのブラジル人の身体的特徴は日本人のそれとまったく異なるし、多くの場合日本語をほとんど話せない)や「定住者」としての三世が増加するなど、同じく「日系人」のカテゴリーに含まれてはいるものの、その内実は多様化している。森幸一(一九九九)はここから新しいアイデンティティが立ち上げられつつあるとし、この新しいアイデンティティを〈ニッケイ・アイデンティティ〉と呼ぶことを提唱している。この新しいアイデンティティの形成の背景には、日本国内での日系ブラジル人デカセギによる犯罪、生活上や労働上の諸問題が多発しているとのメディアの報道に接することで、「ブラジル人」という社会的範疇に対して付与されるイメージが悪化しているという現状がある。ここから「犯罪や問題を起すのは非日系人」であり、われわれ〈純血〉日系人は彼ら「ブラジル人」とは違うという差異化を通じて、この〈ニッケイ・アイデンティティ〉が立ち上げられてきたと考えられる。

外国人住民との共生

まとめ

これまでの議論を要約すると、ブラジルから日本への「デカセギ」というトランスナショナルな移住に伴って、来日以前には「二ホンジン」としてのアイデンティティを抱いていた日系ブラジル人たちは、日本社会の偏見や差別にさらされることで、初期のアイデンティティの混乱ないし危機を経験することになる。この混乱を乗り越えるための心理学的ストラテジーとして「ブラジル人アイデンティティ」が立ち上げられ、さらにその後の状況の変化によって、「ニッケイ・アイデンティティ」とも呼ぶべき新しいアイデンティティが立ち上げられてきている。このように、わが国における日系ブラジル人のアイデンティティはきわめて多様かつ複雑なものになってきており、今後もまた新たなアイデンティティが立ち上げられてくることが予想される。

引用文献(刊行年順)

前山隆、一九八二、「ブラジルの日系人におけるアイデンティティの変遷」『ラテンアメリカ研究』第四号。

Nakagawa, Decio. 1994. "Dekasegu." Unpublished paper.

コガ、エウニセ・アケミ・イシカワ、一九九四「日本におけるブラジルの日系エスニック集団―同化と軋轢の間で―」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文。

コガ、エウニセ・アケミ・イシカワ、一九九五「日系ブラジル人のアイデンティティ―文化資本から見た日系人アイデンティティ―」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第一九号。

深沢正雪、一九九九、『パラレル・ワールド』潮出版社。

森幸一、一九九九、『ブラジルからの日系人デカセギの十五年―還流型移住としての「デカセギ」―』『ラテンアメリカ・レポート』第一六巻第一号。

Roth, Joshua Horaka. 1999. *Defining Communities: The Nation, the Firm, the Neighborhood, and Japanese-Brazilian Migrants in Japan*. Ph.D. diss., Cornell University.

Lesser, Jeffrey. 1999. *Negotiating National Identity: Immigrants, Minorities, and the Struggle for Ethnicity in Brazil*. Duke University.

Linger, Daniel Tourno. 2001. *No One Home: Brazilian Selves Remade in Japan*. Stanford University Press.

前山隆、二〇〇一、『異文化接触とアイデンティティ―ブラジル社会と日系人―』御茶の水書房。
Hirabayashi, Lane Ryo, Akemi Kikumura-Yano, and James A. Hirabayashi (eds.), 2002. *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan*. Stanford University Press.

Roth, Joshua Horaka. 2002. *Brokered Homeland: Japanese Brazilian Migrants in Japan*. Cornell University Press.

Tsuda, Takeyuki. 2003. *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. Columbia University Press.

Lesser, Jeffrey (ed.). 2003. *Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism*. Duke University Press.



豊田市保見団地の掲示板（筆者撮影）